

要望演題 | 1-13 術後遠隔期・合併症・発達

要望演題7

術後遠隔期・合併症・発達

座長:

藤原 優子 (東京慈恵会医科大学)

我那覇 仁 (沖縄県立南部医療センター・こども医療センター)

Thu. Jul 16, 2015 1:50 PM - 2:40 PM 第7会場 (1F シリウス A)

I-YB7-01~I-YB7-05

所属正式名称: 藤原優子(東京慈恵会医科大学 小児科)、我那覇仁(沖縄県立南部医療センター・こども医療センター 小児循環器内科)

[I-YB07-04]心房中隔欠損症・心房中隔欠損閉鎖術が小児の身体発育に及ぼす影響

○村上 卓¹, 塩野 淳子¹, 石橋 奈保子¹, 石川 伸行¹, 阿部 正一², 野間 美緒², 坂 有希子², 堀米 仁志^{1,3} (1.茨城県立こども病院 小児循環器科, 2.茨城県立こども病院 心臓血管外科, 3.筑波大学医学医療系 小児科)

Keywords: 心房中隔欠損症, 心房中隔欠損閉鎖術, 身体発育

【目的】心房中隔欠損症の多くは思春期まで無症状である。心房中隔欠損症が小児期の身体発育に及ぼす影響について検討した。【対象と方法】2005年1月~2014年12月に15歳以下の心房中隔欠損症103例に延べ106件の心臓カテーテル検査を施行し、他の病態が身体発育に関与しうる25例(染色体異常、左右短絡疾患(心室中隔欠損、動脈管開存)合併、超低出生体重児、側彎合併、肺動脈弁狭窄治療後、成長ホルモン分泌不全、経管栄養、精神運動発達遅滞)を除外した。1)カテーテル検査時の身長SD、体重SDにQp/Qs、Pp/Ps、Rpが及ぼす影響について検討した。2)心房中隔欠損閉鎖術を施行された症例における術前身長SD、体重SD(カテーテル検査時)と術後身長SD、体重SD(術後6~18か月時)を比較検討した。また、Δ体重SD、Δ身長SD(術前と術後の差)に手術時年齢、術前身長SD、術前体重SD、Qp/Qs、Pp/Ps、Rpが及ぼす影響について検討した。【結果】1)81件(80例)(男35:女46、年齢中央値5y3m(範囲5m~14y1m))の体重SD -0.25 ± 1.09 、身長SD -0.16 ± 1.18 (平均±SD)と身体発育の低下を認めた。体重SDとQp/Qs、身長SDとPp/Psに負の相関($r = -0.26, p = 0.02$ 、 $r = -0.29, p = 0.01$)を認めた。2)49例(男27:女22、手術時年齢平均5y5m(範囲9m~13y10m))に心房中隔欠損閉鎖術が施行された。術前体重SD -0.30 ± 1.12 vs 術後体重SD 0.06 ± 0.96 ($p < 0.01$)、術前身長SD -0.20 ± 1.12 vs 術後身長SD 0.06 ± 1.01 ($p < 0.01$)(平均±SD)と術後に体重と身長の増加を認めた。Δ体重SDは術前体重SD($r = -0.48, p < 0.01$)や手術時年齢($r = -0.40, p < 0.01$)と、Δ身長SDも術前身長SD($r = -0.43, p < 0.01$)や手術年齢($r = -0.58, p < 0.01$)と負の相関を認めた。【結論】心房中隔欠損症は短絡量や肺動脈圧が身体発育障害に影響している可能性があり、低年齢で身体発育障害が強い症例では閉鎖術により身体発育の改善が期待される。